

伊勢原市男女共同参画推進委員会の活動

男女共同参画社会の形成を目指す市民のネットワーク化を推進するとともに、男女共同参画の総合的推進を図るため、市長から委嘱された学識経験者や市民により組織されており、「いせはら男女共同参画フォーラム」の企画・運営や、男女共同参画社会を考える情報誌「さきょうフォーラム通信」の



さきょうフォーラム通信

編集・発行を行っています。また、令和5年度～9年度の5年間に、市が市民や市民活動団体、事業所などの皆さんと男女共同参画社会の実現に取り組むための基本的な方向を示す「第3次伊勢原市男女共同参画プラン」を策定しました。着実な進展に向けて、毎年度にお

る施策・事業の進捗状況について、委員会が点検・評価を行い、報告書を公表します。



6月8日に行われた全体会議の様子

誰もが持てる能力を発揮できる社会へ

慶應義塾大学SFC(湘南藤沢キャンパス)研究所で上席所員として幅広い分野について研究する傍ら、伊勢原市男女共同参画推進委員会委員を務める和田さんにお話を伺いました。



慶應義塾大学SFC研究所 上席所員 和田 優さん

一まず、性別役割分担とは何ですか。

性別を基準として社会や集団の中で期待されている役割のことです。例えば「男は仕事、女は家庭に入る」「男は強くあれ、女はおしとやかで」といった昔からの慣例による価値観がこれに当たります。この基準は国や地域によって異なる場合が多く、家庭によっても価値観は異なります。

もちろん、要素によっては男性にしかできないことや女性にしかできないこともあります。一国内における現状はいかでしょうか。

「男だから」「女だから」という理由で役割を決めつけられることがあります。個人の意思で男らしくになりたい、女らしくなりたいと思ひ、その役割を担うことは自由です。また、自分の性別に沿った役割を希望して選択する人もいます。

しかし、世の中には家事が得意な男性も苦手な女性もいますし、子育てしたい男性も、キャリアを積んで働きたい女性もいます。自分の意思とは異なる役割を社会や他者に強制され、自

分らしい生き方ができていない状態は性別役割を演じさせられているといっても良いかもしれません。

一どのような課題があると思いますか。

現代では、女性の社会進出が進み、性別役割分担の境界は薄れつつあります。しかし「男は仕事、女は家事」という意識もまだまだ根強く残っており、無意識のうちに自分の意思とは異なる役割を「仕方ない」と諦めて「こうするのが当たり前」と行動が制限されている場面も見受けられます。

本来は男女問わず個人の能力によって役割分担を決めるべきですが、長年の仕組みや制度の中で、男性は主たる業務、女性は補助的な業務などと割り振られ、賃金体系も男性優位に設定されている企業はまだ多いことも実情です。

一身近なところで、性別役割分担を感じたことはありますか。

私たちの年代は「男は男らしく。泣かない。女を守れ。家族を養うもの」という価値観で育ってきました。仕事においても、男性は遅くまで残業して成

果を上げるものという考え方が当たり前でした。

私は長男だったため、当然に家を継ぐものという価値観もありました。以前、海外の広い世界で活躍したいと考えたこともありましたが、このような価値観から自分の気持ちにブレーキをかけたこともありました。性別役割を決めつけられることに対して、女性だけではなく男性も生きづらさを抱えている現状があると思います。

一「こうあるべき」と押し付けられてしまうと感じるときは、どうすればいいですか。

自分にとって納得がいかないものであれば、はっきりと相手に伝えるべきだと思います。例えば、家庭内での役割分担であれば、パートナーと話し合う機会を設けることがお互いの理解につながると思います。

一最後に、尊重し合える社会をつくるため、私たちにできることはありますか。

「こうあるべき」という強い思い込みは一歩間違えると、自分だけでなく周りの人の行動を制限し、それぞれが持っている個性や能力を発揮しづらくしてしまうことがあります。

まずは一人一人が普段の生活に潜む「無意識の偏見」に気をつけ、お互いの価値観を認め合うことが大切だと思いますね。

「あなたらしさ」を大切に

一性別役割分担意識を考える一

「男らしい」「女らしい」という言葉を聞いて、どのような姿や行動を思い浮かべますか。あなたが考える当たり前が、他の人にとっては苦痛であったり、違和感を与えたりすることがあります。「男は〇〇〇のはず」「女は〇〇〇でないとおかしい」といった無意識の思い込みが、気付かぬうちに周囲を傷つけているかもしれません。

一人一人の個性や価値観は違うため、生き方も異なります。市では、人権施策推進指針(改定版)に基づき、多様性を互いに認め合い、尊重し合うことができる社会を目指しています◇右の写真は「男女共同参画について考える展示会(6月15日～30日実施)」の様子 人権・広聴相談課 ☎94-4716



男らしさ、女らしさってなんだろう？ 自分らしさを探しましょう！



アートの世界から考えるジェンダー問題

昨年の12月20日に開催された「いせはら男女共同参画フォーラム」で講演をしていただいた竹田さんに、芸術分野における男女の格差について話していただきました。



EGSA JAPAN代表、東京外国語大学講師 竹田 恵子さん

比較的水平で女性が多いと思われている芸術分野においても、性別によって置かれている立場が異なる状況が見られます。

国内の美術館にある収蔵品の作家を性別で比較すると、約8割～9割は男性作家のもので、美術館にある作品ということは一定の評価を受けています。それでは、女性に優れた芸術的才能を持つ人が少ないかということ、そうではありません。背景にあるのは、置かれていた状況

女性芸術家の育つ環境が整っていないということが問題の根底にあります。例えば、国内外の第一線で活躍する芸術家を輩出してきた東京藝術大学は、戦前まで男性しか入学することができませんでした。当時、女性は絵画や彫刻などではなく、手芸的要素の強い刺しゅうや生け花など、いわゆる良妻賢母にならざるを得なかった過去

去があります。さらに、国内の美術大学に在籍している学生の女性比率は7割程度ですが、芸術家として活動を続けても子育てや家事の負担から、キャリアを諦めてしまうこともあります。また、フリーランス(個人で仕事を請け負い働く人)が多く産休・育休の制度がない場合や、労力と時間をかけても賃金が低いといった理由から、自分の人生の選択肢が狭められる傾向にあります。

才能ある女性が自分のキャリアを諦めずに活動を続けることができる環境や制度を整えることが大切です。

家庭においては、父親と母親が対等な関係でない場合、子どもはその状況を見て、世の中はそういうものだと思ってしまう。幼い頃から男女の平等について考えることが、誰もが等しく活躍することができる社会を形成する第一歩だと思います。



小さな一歩が、よりよい未来を築いていく

女性の社会進出が進む現代において、社会全体が男女共同参画の方向に向かいつつあります。その一方で、内閣府が昨年度実施した世論調査では、世代によって「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考えに対する意識に差があり、価値観に相違があることが分かります。

根底の一つにあるのは過去からの積み重ねだと考えられてい

ます。戦前の民法における家制度では男女の役割は明確に区別されていたほか、高度経済成長期においてはこうした役割分担が効率的とする日本型雇用慣行もありました。しかし、少子高齢化が進む中、多様化する市場ニーズやリスクへの対応力を高めるためには、多様な人材を生かし、その能力を最大限に発揮できる機会をつくることが求められています。

「社会の空気」を変えていくことは並大抵のことではありません。しかし、私たちは自分の言葉や行動に自覚を持ち、「男だから/女だから」と決めつける前に相手の立場に立って物事を考えていく必要があります。そうしたことを積み重ねていくことで、男女が対等なパートナーとして社会参画できる環境の実現に向け、前進していくことになるのではないのでしょうか。

